『最後の一句』

この時佐佐(ささ)が書院の敷居際(ざわ)まで進み出て、「いち」と呼んだ。

「はい」

「お前の申立(もうしたて)には嘘(うそ)はあるまいな。若(も)し少しでも申した事に間違があって、人に教えられたり、相談をしたりしたのなら、今すぐに申せ。隠して申さぬと、そこに並べてある道具で、誠の事を申すまで責めさせるぞ」佐佐は責道具のある方角を指さした。

いちは指された方角を一目見て、少しもたゆたわずに、「いえ、申した事に間違はございません」と言い放った。その目は冷(ひや)かで、その詞(ことば)は徐(しず)かであった。

「そんなら今一つお前に聞くが、身代りをお聞届けになると、お前達はすぐに殺されるぞよ。父の顔を見ることは出来ぬが、それでも好いか」

「よろしゅうございます」と、同じような、冷かな調子で答えたが、少し間を置いて、何か心に浮んだらしく、「お上(かみ)の事には間違はございますまいから」と言い足した。

佐佐の顔には、不意打に逢(あ)ったような、驚愕(きょうがく)の色が見えたが、それはすぐに消えて、険しくなった目が、いちの面(おもて)に注がれた。憎悪(ぞうお)を帯びた驚異の目とでも云おうか。しかし佐佐は何も言わなかった。

次いで佐佐は何やら取調役にささやいたが、間もなく取調役が町年寄に、「御用が済んだから、引き取れ」と言い渡した。